

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 22 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008-2012

課題番号：20330100

研究課題名（和文）メトロポリスからの外部性と創造性：千葉エリアからみる中心一周縁のシステム変容

研究課題名（英文）Externality and Creativity of Metropolis : Alternation of Center-Periphery System in Chiba Area

研究代表者 尾形 隆彰 (OGATA TAKAAKI)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：80125913

研究成果の概要（和文）：千葉地域における新しい文化の創出や、海という自然環境を生かしたレジャー、ディズニーという人気観光スポットを生かした地域づくり、また都心からの地の利を生かした移住による「田舎暮らし」といった可能性を明らかにした。またそうした地域に住む住民の意識や行動の変化を捉えることにも成功した。

研究成果の概要（英文）：We find in Chiba-Area, creation of new culture and re-building towns using natural environment resources like sea and artificial resources like Tokyo Disney Land. And we consider the new possibility that so many people start to living in rural area removing from urban area. We succeed to know, the changing behavior and consciousness of people live in several Chiba-Area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2012年度	1,700,000	510,000	2,210,000
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：外部性、創造性、まちづくり、田舎暮らし、マリンレジャー、記憶と文化、市民の地域意識、ディズニー、新しい伝統

1. 研究開始当初の背景

千葉県は日本の平均的な産業構造を持つ、日本を代表できる重要な県でありながら、東京という大都市に近接することによってむしろ外部性や周縁性を持つ地域でしかなかった。中央中心の開発の時代は去り、千葉独自の開発の可能性を発見し、自発的・自立的な発展を模索する時代になった。

2. 研究の目的

上記の背景から、現に千葉地域にあるは萌芽的な諸資源を見直し、それが今後どのような可能性を秘めているかについて実証的に調査しようと考えた。

3. 研究の方法

あくまで実証的研究を目指したので、代表的な千葉地域の確定を行い、インタビューやアンケート、資料の収集といった様々な調査を実施した。対象地域は、千葉市内の各地一稲

毛区の「夜灯し」活動、稲毛海岸地区のマリンレジャー、浦安の総合的調査、外房地区の勝浦、鴨川等の田舎暮らしの実態や新しい農業の検証、佐倉地域などの伝承や農業者の記憶や文化継承など多岐にわたった。

4. 研究成果

以下は各年次の申請と報告について記す。その後で、全体の成果を評価する。

平成 20 年度の計画：千葉エリアは、東京圏の「分極化のフロント」としての周辺性をもつ一方で、農漁業や工業地帯、観光資源など一通りの産業セットを有していることから、脱成長社会・脱東京中心社会に向けた新たな市民活動・起業モデルが叢生している。情報の集積点であるメトロポリスとの地域的近さ、ネットワークの容易さが幸いして、「ポスト開発」モデルを提起して行くポテンシャルを持っている。

そこで初年度には、教育・福祉関連分野、余暇観光・生活関連分野において簇生しつつある社会企業・NPO や、それと関わって展開される自治体政策についてのパイロット的な現地調査を行い、そのポテンシャルを確かめる。具体的には、犬塚を中心として情報化や市民活動支援の先進自治体である市川市を、櫻井を中心として高度成長期来移住者層の「風景の記憶」が累積していると考えられる千葉市美浜区を、初年度の調査地域とする。それ以外にも、新しいタイプのストーリー志向型観光や高齢者福祉の現場などの事例を発掘するための調査を適宜実施する。

いっぽう千葉エリアの空間的展開についての見通しをつけるための統計分析作業は、中澤を中心として行う。千葉エリアの「半周辺」性と創造性の全体像を描き出すために、倉沢・浅川『東京圏の社会地図』（2004）の手法を簡略化して GIS（地理情報システム）データにもとづく社会地図作成作業を行う。それに基づいて、高度成長後期に開発された複数の郊外住宅地をはじめ、各地区におけるコミュニティ形成、住民の階層構成、住民活動の可能性などについて、特性と実情を把握する。

また、下記連携研究者も含めて、平成 21-22 年度の本格的な調査展開に向けて研究会を隔月の頻度で開催し、情報と課題の共有につとめる。

平成 20 年度の成果：

本年度には、余暇観光・生活関連分野や情報分野において簇生しつつある市民活動や、それと関わって展開される自治体政策についてのパイロット的な現地調査を行った。具体的には、犬塚を中心として情報化や市民活動の先進自治体である浦安市を、桜井を中心として高度成長期の地付層と来住者層の「風

景の記憶」が累積していると考えられる千葉市稲毛区および浦安市を、初年度の調査地域とした。それ以外にも、新しいタイプのストーリー志向型観光の事例として稲毛地区のレジャーや鴨川の柵田オーナー制度を視察した。

一方、千葉エリアの空間的展開についての見通しをつけるための統計分析作業を、中澤を中心として行った。千葉エリアの「半周辺」性と創造性の全体像を描き出すために、GIS（地理情報システム）を使い、国勢調査データにもとづく基礎的な社会地図を作成し冊子にした。以上の基礎的な作業・調査により、千葉エリアの中でも戦略的に重要と考えられる調査地点やテーマが明確化してきたので、2 年目はこれらのテーマの肉付け作業を行い、3 年目のサーベイに備えることになる。

平成 21 年度の計画：千葉エリアは、東京圏の「分極化のフロント」としての周辺性をもつ一方で、農漁業や工業地帯、観光資源など一通りの産業セットを有していることから、脱成長社会・脱東京中心社会に向けた新たな市民活動・起業モデルが叢生している。情報の集積点であるメトロポリスとの地域的近さ、ネットワークの容易さが幸いして、「ポスト開発」モデルを提起して行くポテンシャルを持っている。そこで初年度には、教育・福祉関連分野、余暇観光・生活関連分野において簇生しつつある社会企業・NPO や、それと関わって展開される自治体政策についてのパイロット的な現地調査を行い、そのポテンシャルを確かめた。具体的には、犬塚を中心として情報化や市民活動支援の進んだ浦安市を、桜井・片桐を中心として高度成長期来移住者層の「風景の記憶」が累積していると考えられる千葉市稲毛区および、この文脈でも興味深い浦安市を、初年度の調査地域とし、さまざまな地域団体との関係を築いた。また尾形および全員で、新しいタイプの余暇活動やストーリー志向型観光の例として稲毛海岸や鴨川での事例発掘に努めた。また中澤を中心に、千葉エリアの空間的展開についての見通しをつけるため簡単な社会地図作成作業を行い、冊子にまとめた。

こうした作業によって、千葉における「メトロポリスからの創造性」を見いだす見通しがついてきたので、平成 21 年度は、これらの事例を更に掘り下げ平成 22 年度に実施する大規模サーベイの準備を進める。継続する事例調査としては、桜井・片桐による稲毛における「記憶」の聞き取りを、稲毛せんげん通り商店街の活動とタイアップしながら進めるほか、鴨川における柵田トラスト活動の参加型調査を、尾形・中澤の指導のもと大学院生が進める。当該年度の新規の予備的調査としては、連携研究者から分担者となった米

村が千葉の Family Business について、渋谷が若者の文化について、出口が福祉施設について、それぞれ事例発掘を行い、三年目に備える。

内部組織としては、数人の大学院生にも積極的に関与してもらうほか、研究補助員一名に代表者・分担者の活動を補佐してもらい、進行管理の効率化をはかる。また学部生を調査員・調査補助員として積極的に活用し、それに伴う謝金を支払った。

平成 21 年度の成果: 千葉は何重もの意味で、日本社会の構造変動の今後を占うような戦略的な位置にあるが、研究の蓄積が浅い。しかしそこでは東京メトロポリスの外部性を引き受ける一方で、郊外住民のポテンシャルを発揮しつつ新しい社会動向を先取りして創造性を発揮しやすいという、大都市の両義性を反映するシステム論的位置を持っている。この特徴的なエリアで叢生する市民活動の事例研究や、総合的サーベイ・空間分析を通じて、既存の「中心・周縁」軸を変容させるシステム変動のポテンシャルを発掘しようとするのが本課題の趣旨である。

教育・福祉関連分野、余暇観光・生活関連分野において簇生しつつある社会企業・NPO や、それと関わって展開される自治体政策についてのパイロット的な現地調査を行い、そのポテンシャルを確かめた。具体的な対象地は、浦安市、千葉市稲毛区、鴨川市、などである。このうち浦安地区における調査結果は、犬塚の編集のもとで「はっけん!うらやす」と題する調査報告書として、20 度末に刊行された。二年目にあたる 21 年度は、これらの事例を更に掘り下げ、来年度に実施する大規模サーベイの準備を進めた。継続する事例調査としては、桜井・片桐・中澤が稲毛地区における東京湾の「記憶」の聞き取りを、稲毛商店街振興組合が主導する「第 4 回いなげ夜灯まつり」とタイアップしながら進めた。参加型調査の結果、この活動が既存の地域組織の再編成を促し、新しい地域活性化モデルを創り出しつつあることを確認できた。一方、研究代表者の尾形は、学部学生の調査員とともに、(1)鴨川市におけるリタイア移住者の調査、(2)稲毛海岸地区や浦安地区におけるレジャー活動の調査を実施し、創発される新しい活動や意識のあり様を探った。結果は「無限大∞千葉県—千葉の新しい可能性を考える」という出版物に纏められた。研究分担者の渋谷、米村、出口は、それぞれ有機農業運動や福祉・介護業界における新しい取り組みについて予備的リサーチを行い、来年度の本格調査に備えた。なまた稲毛地区のまちづくりと記憶に関する調査成果も、中澤の編集によって今年度中には報告書としてまとめられた。

なお以上のような調査の過程で、数人の大学院生にも積極的に関与してもらうほか、研

究補助員一名に代表者・分担者の活動を補佐してもらった。

平成 22 年度の計画: 千葉エリアは、東京圏の富の「おこぼれ」に与る場所から、「ポスト開発」モデルを提起して行く場所へと変容しつつある。恵まれた気候と自然、そこで育まれた文化を踏まえ、こうした活動を位置づけることで、千葉のアイデンティティを再検討するよすがともなり、地元社会にも貢献できる。そこで市民活動の事例研究、住民層の生活史的研究、総合的サーベイ・空間分析を通じて、既存の「中心・周縁」軸を変容させるシステム変動のポテンシャルを発掘しようとする。

これまで 2 年間の準備的研究により、具体的なテーマとしては以下のような焦点が結ばれつつある。①浦安や稲毛など旧漁業地域における高度成長期以来の時空間・諸活動・記憶の整理 ②鴨川など後背地が食・農・余暇を通じて都市の人々を引きつけているプロデューサー・モデルの解明 ③稲毛中心市街地における、地域組織を巻き込んだタウンマネジメント活動の参与観察により、まちづくり論への貢献。その他、福祉・多文化主義・郊外の今後などについても千葉ならではのポテンシャルの探求を進める。

以上のように準備期間の 2 年を経て整理された研究目標に対応して、22 年度は分担者各自がサブテーマを設定しながら本格調査を実施する。千葉市稲毛のタウンマネジメントについては、中澤・桜井・片桐を中心に参与観察を継続する。桜井は、東京湾の「記憶」という観点からも稲毛・浦安などに引き続き注目する。片桐は、博物館を手がかりに、地域社会と記憶の問題にアプローチする。昨年度一定の進展をみせた後背地における食と農の取り組みについては、米村を中心に鴨川・成田などで調査を進める。また新しいテーマとして、21 年度の予備調査を踏まえて出口は宅老所・グループホームの展開と介護事情について聞き取りを中心とする調査に赴く。渋谷は、千葉全体における外国人の状況について調査しながら、千葉で形成される多文化主義のゆくえを考察する。また中澤・渋谷は、千葉の郊外が縮小社会の中で目指すべき社会像についても調査・考察を深める。犬塚・尾形は千葉の社会構造変化に関する総合的な考察を深めるとともにマリンスポーツ野可能性についてヨット航海の社会的実験も行う。その他、千葉のシステムの位置を浮き彫りにできるような事例が発掘できれば適宜調査を行う。予算面に関しては、この集票調査のため民基本台帳閲覧費・郵送費・調査補助員謝金などが予算化され、これが予算の 1/3 近くを占めている。その他過去 2 年度になかった予算としては、稲毛商店街振興組合に調査アレンジ委託費を支払い、参与観察

の進行をスムーズなものにする。またヨット帆走実験の費用の一部を支出する予定である。その他、代表者・分担者 8 名が大学院生・学部生などを補助者として活用しつつ縦横に調査するため、旅費・謝金なども過去 2 年度に比較して大きめの額が計上されている。したがって内部組織としては、数人の大学院生に積極的に関与してもらうほか、学部生を調査員・調査補助員として活用し、それに伴う旅費等を支払う。これまで通り研究補助員一名に代表者・分担者の活動を補佐してもらい、進行管理の効率化をはかる。

平成 22 年度の成果

この年度の成果は、桜井、片桐の「記憶」の「かたり」調査は、平成 23 年になって桜井により「問題経験の語りたさ、あるいは沈黙」とい論文や「戦争体験を語る…伝えるという実践-日中戦争の体験から-」という学会報告がなされた。また中澤は『千葉市いなげ「夜灯し」(よとぼし)祭』とい報告書を纏めた。犬塚はそれまでの研究成果に立脚して平成 23 年度になって「京葉臨海地域住民の新たな産業構想と住民生活の変容」という論文を執筆した。

平成 23 年度の計画

この年度は、前年度の調査を引き続き継続した。桜井は、東京湾の「記憶」という観点から稲毛・浦安などに引き続き注目する。片桐は、博物館で地域社会と記憶の問題にアプローチする。後背地における食と農の取り組みについて米村を中心に鴨川・成田などで調査を継続する。また新しいテーマとして、出口は宅老所・グループホームの展開と介護事情について聞き取りを中心とする調査に赴く。また渋谷は千葉全体における外国人の状況について調査しながら、千葉で形成される多文化主義のゆくえを考察する。また中澤・渋谷は、千葉の郊外が縮小社会の中で目指すべき社会像についても調査・考察を深める。

平成 23 年度の成果：

こうした計画に沿った研究を行った結果、渋谷は、新しい文化形成の社会関係を調査し渋谷望編著『ちばの樹-新しいつながりの試み-』という報告書を平成 23 年 11 月に纏めた。米村は『ちばのわ-人・食・地域の交点-』という報告書を平成 25 年に纏め、他に『『家』研究の現代的意味を探る-家族関係と社会関係の境界に関する予備的考察-』という論文を、出口は『ケアと支援のいま in ちば 2011』という報告書を平成 24 年に纏め、他に『『熱を出した子ども』をめぐるケアの『私事化』と『脱私事化』』を 25 年になって執筆した。こうして各人は計画にしたがって研究を進め、それらは最終的に平成 24 年末の 9 本の論文集『ちばの創造性-メトロポリスからの外部性と創造性-千葉エリアからみる中心-周縁軸の変容』として纏めら

れることになった。

平成 24 年度の計画

これまで行って来た調査研究に不足した部分を追加調査を行い、最終的な研究成果執筆に各自取り組んだ。「夜灯し」実験は継続され、マリン・レジャーに対する 3・11 災害の影響なども追加調査することとした。それぞれの成果は平成 25 年 3 月に 9 本の論文に纏められた。その題目は以上の通り。

序論：千葉という創造性（中澤）

第1論文：千葉の埋立て開発とサブシステム（渋谷）

第2論文：稲毛夜灯という「伝統の創造」（中澤）

第3論文：稲毛地区住民の意識と「稲毛あかり祭『夜灯し』」（永谷）

第4論文：稲毛海浜公園の可能性（尾形）

第5論文：マリンレジャーとしての稲毛ヨットハーバーの可能性（尾形・大村・佐瀬）

第6論文：ディズニーのある町、浦安の可能性（尾形）

第7論文：田舎暮らしと移住の可能性（尾形・田川）

（寄稿）別荘地での余暇の過ごし方と移住・定住化促進への試み（田川）

第8論文：鴨川の交流まちづくりモデル（中澤）

第9論文：千葉における戦後農民教育と農業思想（米村）

5 年間全体の成果と評価

新しい文化の形成では稲毛地区の「夜灯し」活動に関して、半ばパーティシパント・オブザベーションの形を取りながら 5 年間の実験を観察してきた。必ずしも意図したことではなかったが、研究と実践が一致した例でもある。また稲毛市民の中に生まれた「郷土意識」も発見し、浦安市における「東京都民的意識」にありながらも、新しい住民活動が生まれる可能性も見いだした。また「田舎暮らし移住」の実態を始めて体系的に明らかにした。この傾向は今後も続くものと思われるので千葉地域に対して貴重な資料的貢献となった。また食と農に関する現象学的社会学の事実収集が行われ、地域ケアやカウンターカルチャーの可能性も指し示した。さらには三方を海に囲まれた千葉県における「海」の意義をクローズアップさせ、今後の可能性を示唆した。な、これらの全過程で、地域文化とは歴史の記憶として心にとどめられることで、新たな文化が形成され、外部性と周縁性からのみ語られる千葉からの脱却の道が

あることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 桜井厚「問題経験の語りがたさ、あるいは沈黙」『社会学叢書』(日本大学社会学会)第172号、2011年、50-58頁、査読無
- ② 犬塚先「京葉臨海地域住民の新たな産業構想と住民生活の変容」『千葉大学人文学報』第41号2012年、105-115頁査読無、
- ③ 米村千代『『家』研究の現代的意味を探る—家族関係と社会関係の境界に関する予備的考察—』千葉大学人文社会科学研究所、『境界と際社会学』研究プロジェクト報告集第260集、2013年3月、177-189頁
- ④ 出口泰靖『『熱を出した子ども』をめぐるケアの『私事化』と『脱私事化』』、千葉大学人文社会科学研究所、『境界と際社会学』研究プロジェクト報告集第260集、2013年3月、102-119頁

[学会発表] (計1件)

- ① 桜井厚、帳嵐「戦争体験を語る…伝えるという実践-日中戦争の体験から—」、日本オーラルヒストリー学会、松山大学2011年9月10日

[図書] (計7件)

- ① 尾形隆彰編著『無限大∞千葉県—千葉の新しい可能性を考える』千葉大学社会学研究室、2010年6月、総246頁
- ② 中澤秀雄編著『千葉市いなげ「夜灯」(よともし)祭』千葉大学社会学研究室、2011年3月、総155頁
- ③ 渋谷望編著『ちばの樹—新しいつながりの試み—』千葉大学社会学研究室、2011年11月、総292頁
- ④ 中澤秀雄編著『海と山は連携できるか? 鴨川調査報告書』中央大学法学部中澤研究室、2012年3月、総132頁
- ⑤ 出口泰靖編著『ケアと支援のいま in ちば 2011』千葉大学社会学研究室、2012年9月、総269頁
- ⑥ 米村千代編著『ちばのわ—人・食・地域の

交点—』

千葉大学社会学研究室、2013年3月、総292頁

- ⑦ 尾形隆彰編著、他9編の論文集『ちばの創造性—メトロポリスからの外部性と創造性—千葉エリアからみる中心—周縁軸の変容』千葉大学社会学研究室、2013年3月、総174頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

尾形隆彰 (OGATA TAKAAKI)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号: 80125913

(2)研究分担者

犬塚先 (INUZUKA SUSUMU)
千葉大学・名誉教授
研究者番号: 7009752

桜井厚 (SAKURAI ATSUSHI)

立教大学・社会学部・教授
研究者番号: 80153948

片桐雅隆 (KATAGIRI MASATAKA)

千葉大学・文学部・教授
研究者番号: 90117935

中澤秀雄 (NAKAZAWA HIDEO)

中央大学・法学部・教授
研究者番号: 20326523

米村千代 (YONEMURA TIYO)

千葉大学・文学部・教授
研究者番号: 90262063

渋谷望 (SIBUYA NOZOMU)

日本女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 30277800

出口泰靖 (DEGUTI YASUNOBU)

千葉大学・文学部・教授
研究者番号: 70320926

(3)連携研究者

()

研究者番号: